

新連載②

内海善雄の

(ITU前事務総局長)

やぶ睨み  
「ネット社会」論

# 疑うことが苦手な国民性を襲う 「検索エンジン」の罠

報を信じているのかと、私は驚いた。せめて、「○○○機関が発表している統計だ」と反論してほしかった。

最近の大学生は、どのような課題に対して、ネットから得た情報を切り張りして即座にレポートをまとめるのが上手だ。ところが教官も、地道に原資料に当たる研究はせず、もっぱらネット探索が仕事になっているようである。

しかし、うっかりすると、活用しているはずの検索エンジンにすつかり活用され、挙げ句の果ては支配されることになるのだ。そんな怖さを利用者は、さて、どこまで存じであろうか。

## 疑わしきネットの活字情報

ある会議で、有名大学の教授が携帯電話の普及状況を説明した。それはITU（国際電気通信連合）の統計とは異なるものであったので指摘したところ、その教授は「インターネットに載っていた」と不服そうであった。学者でさえもインターネットに載っている情

情報通信技術の発達で、必要な情報をいとも簡単に、しかも即座に入手することが可能となった。しかし、その情報の質は何も保証されていない。新聞や雑誌は、記者や編集者によりフィルターにかけられた、一応信頼できる情報であるがゆえに、「活字」の重さがある。ネットから得られる情報も活字を使っているため、無意識のうちに同じ活字の重さを感じる危険がある。

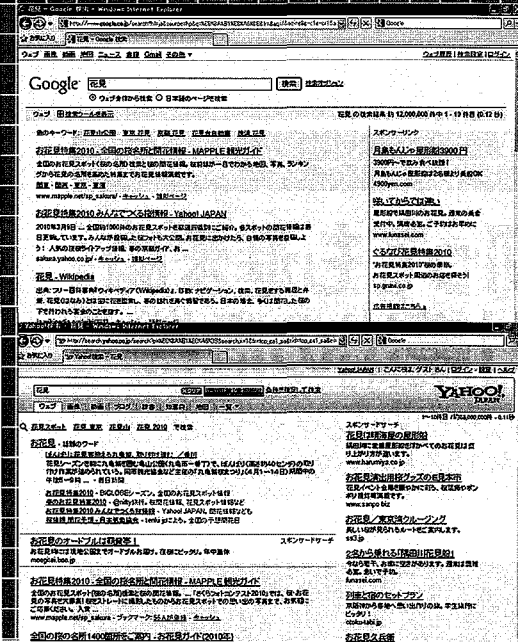
## 検索エンジンのコントロール

ネットに蓄積された膨大な情報も検索しなければ使えない。グーグルやヤフーの検索エ

ンジンは常時、世界中のサイトを徘徊してデータベースを作成し、無限の情報の中から、求められた情報が存在するページを一瞬のうちに絞り出す。グーグルは、有益な情報ほどより多くのサイトがそのページにリンクを張っているという仮定を元に、検索されたページの順番をつけて並べるといふ。しかし、この検索方法、すなわちアルゴリズムの詳細はまったくの企業秘密である。

私も少し情報を発信したいと思い、趣味も兼ねて「内海善雄のホームページ」を立ち上げた。当初、「内海善雄」で検索してもヒットできなかったが、数カ月後、やっとデータベースに登録されたのか、検索できるようになった。しかし、表示順位は数十番目であった。そこで、リンクを張ることを多方面に依頼するなど工夫した結果、最上位に位置するようになった。だが、他の検索語、例えば「ITU」とか「情報通信」とかのキーワードでは、何十万とある検索結果の中に埋没して探し出すことは不可能である。

われわれは、検索結果が表示されたサイト一覧のごく上位、実際は教番目までしか訪問



れない。ということとは、手に入れた情報を取捨選択は事実上、グーグルやヤフーの検索エンジンの「お勧め」のなすがままになっているのである。

例えば、レンタカーを利用したい人はかつては電話帳でレンタカー屋を探したが、今はネットで探す。したがって、自社のサイトが検索結果の上位に現れなければ、そのレンタカー屋にとってはホームページ作成の値打ちはない。そのために、検索エンジンのアルゴリズムを解析し、上位に検索結果が現れるようホームページを作成し直す専門の業者が現れ、その技術を競っている。

グーグルやヤフーは、検索結果を表すページに小さい広告を出す。例えばレンタカーと

## グーグルやヤフーの驚異的發展

検索すれば、レンタカー屋の広告を表示する。前述の検索結果が上位に現れないレンタカー屋も、この広告を出せば、即座に検索結果のページに表示される。もちろん、一番高い広告料を払ったものがトップに表示される。この広告は検索結果の表示と似たもので、これを見る者の大半は広告と認識していないという調査結果が出ている。

テレビや新聞広告で広く一般に広告をするのに比較して、このような絞った検索連動型の広告は効果が極めて高い。またたく間に巨万の広告料がグーグルやヤフーに集まるようになった。その結果、テレビや新聞などは今、経営が大ピンチである。

グーグルやヤフーは過去の検索履歴を基に、その人の関心事を知り、より一層個別化した広告ビジネスを行うことが可能である。さらに検索サービスだけでなく、ワープロや表計算、映像の保存サービスなど、各種のサービスをネット上で無料提供している。ユーザーには大変便利であるが、これらの無料サービスを通じて個人情報やさらに蓄積され、それが広告ビジネスに活用されるのである。

検索で上位表示されるにはわけがある……

### 疑って真実を求める心

私が八年ぶりに日本に帰国して驚いたことは、マスコミヤ評論家が皆同じことを発言し、異論を挟む者が少なくなったことだ。各種の

疑うことが苦手の国民が、検索エンジンが選別した情報に依存し、自らの情報を検索エンジンに提供している。しかも、民間企業が提供するこの検索エンジンはまったくのブラックボックスであり、ただただ彼らの企業倫理を信用する以外に道がないという恐ろしいことが起きているのだ。ネット時代の今ほど、「疑問を感じ、真実を追究する心」が求められている時はないと思う。

(この項続く)



**内海善雄 (うつみ よしお)**  
 1942年香川県高松市出身、東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省入省。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。現在、財団法人「通信・放送コンサルティング協力」理事長。

窓口でも、お客のさまざまな個別状況にマニュアル通りの拘り定規な対応になって、ちょっとした応用動作ができず、トラブルが多発している。要するに、皆考えなくなったということを強く感じた。

抗争の歴史を経てきた外国では、何事にもまず疑うことが先であり、容易に信じることをしない。レストランの勘定でさえ一々チェックし、嘘を言える能力があるほどリーダーになれるという研究すらあるのだ。日本人ほど、メディアや権威者の発する情報を疑わない者はいない。